

二次元ぷち文庫

2D PETIT POCKET NOVELS

新居佑
表紙/高瀬むろ



エンゼル
ヴァーナス
ANOTHER
牝豚へと堕ちた天使

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『エンゼルヴィーナス 牝豚へと堕ちた天使』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリームノベルズ『エンゼルヴィーナス 失墜の天使』（キルタイムコミュニケーション・刊）とともにお読みいただけますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



エンゼル
ヴァーナス

ANOTHER

牝豚へと堕ちた天使

登場人物紹介

Characters

みかみ

三上ハルコ

有名お嬢様学園の生徒。若くして世界に名を馳せるカリスマ女子格闘家でもある。正義の天使エンゼルピンクに変身して、悪の侵略者から地球の平和を守るために戦う。

とうとう

東堂ミサキ

ハルコと同じ学園に通う親友にして、彼女の大切なパートナーでもあるエンゼレイエロー。下ろせばハルコと同じくらい長い髪を、ツインテールに纏めている。

夏真つ盛りの週末のテーマパークは人々のにこやかな笑顔で溢れていた。

「みんな、幸せそうね」

人ごみの中で独り佇む少女は、そんな穏やかな日常を見つめながら、優しい声を発した。少女の名前は三上ハルコ。市内にある全国に名の知れた有名お嬢様学園の学園生である。半そでのブラウスに包まれた瑞々しい肢体は、スラッとした爽やかなものだ。

その発育は特筆もので、百七十七センチ近い高身長だけでなく、彼女が肩をわずかに上下させるだけで、ユサユサと揺れる巨乳の持ち主でもある。首元に巻いた棒ネクタイは、二つの深い谷間にすっかり埋もれてしまっている。

お尻も短めのプリーツスカートの上からでも分かるほどに、プリプリの実が詰まってお尻、テーマパークに訪れた若いカップルの彼氏、そして家族連れのお父親までもが、日差しを受けてより鮮明に浮かび上がるハルコの美体をいやらしい目で見つめては、相方の女性に怒られている姿が目についた。

ストレートに下ろした腰まで伸びる黒髪に、こちらも目を惹く整った美貌。気が強くて意志が固そうな切れ長の瞳には、黒縁フレームの眼鏡がちよこんと可愛らしく乗せてある。しかし、これは別に身体的に必要だからではない。

（すごいわねこの眼鏡。制服なのに誰も私と気付かないなんて……ミサキの発明はやっぱ頼りになるわ）

年相応のあどけなさを残しながら、その実、しっかりと鍛え抜かれたアスリートボディを持つハルコは、世界的に有名な女子総合格闘技団体の若き天才ホープとして、日本のみならず、世界中にファンを持つ超がつくほどの有名人だ。

しかし、△バトルヴィーナス▽と称されるハルコが持つ、もう一つの顔には、彼女の知名度は逆にマイナスに働いた。

今かけている眼鏡は、眼鏡自体が発生させる特殊なフィールドで彼女を覆うことで、三上ハルコではなく、ただの名もない一女子学園生と周囲に認識させるスペシャルアイテムだ。

「さあ、早く出てきなさい。ラーマの怪人めっ」

他の人たちには聞こえないように静かに、しかし強い口調でハルコが呟く。

三上ハルコ——若くして世界に名を馳せるカリスマ女子格闘家であると同時に、悪の侵略者から地球の平和を守りぬく正義の天使、エンゼルピンクその人である。

数ヶ月前、首都・東京に突如として現れた異星からの侵略者たち、ラーマ。彼らは日本の、そしてひいては地球全土の支配を目論み、強力な力を持つ怪人やそれらを束ねる悪しき幹部たちによる破壊活動は、一夜にして東京の中心部を壊滅させた。

7

異星の高度な科学力の前になすすべもなかった人々は、迫り来る死の恐怖にただ怯えるだけだった。

しかし、絶望に沈む人々の前に二人の煌めく希望の天使が舞い降りた。

エンゼルピンク、そしてイエロー。クエンゼルヴィーナスと名乗った彼女たちは、見る者を魅了する艶やかな戦闘スーツに身を包み、無慈悲な暴力と破壊を拡大させるラーマたちに敢然と立ち向かっていった。

怪人たちに匹敵するスーツの力、そして揺ぎない強固なチームワークによって、次々と襲いくる怪人たちを打ち倒し続けていた。

ラーマによる侵略は今も続いているが、人々は以前に近い平和と安らぎを取り戻している。スーツの下に隠れた正体こそ誰も知らないが、二人の美しい天使たちを人々は称えあい、絶大な信頼と尊敬の想いを抱き続けていた。

ピピッ、とエンゼルヴィーナス専用の携帯端末が鳴り、ハルコは取り出した掌サイズの端末、そのディスプレイに目を落とした。

ディスプレイに映っているのは、東堂ミサキ。ハルコと同じ学園に通う親友にして、彼女の大切なパートナーでもあるエンゼルイエローだ。

下ろせばハルコと同じくらい長い髪を、ツインテールに纏めている姿がかわいらしさを

引き立てる。

スタイルはハルコに少し譲るものの、同世代の中では一段抜けた抜群のセクシーボディを誇っている。

彼女も学園の夏服に、カモフラージュ用の眼鏡をかけている。ハルコほどメジャーではないが、ミサキもまたその筋で世界に名の知れた天才科学者だ。

この眼鏡も彼女が開発したものだ。

「こっちはまだ見つからないわ。ハルコ、そっちはどう？」

「ええ、こっちも特に異常なしね」

「そう……報告にあつた事件が奴らの仕業なら、人の集まるココを狙ってくると思つただけ……」

デイスプレイの奥で、ミサキが残念そうな表情を浮かべる。

ここ数日、街で市民たちの生体エネルギーが吸われるという事件が頻発しており、それは人外の力が加わっていると思えない特異なものだった。

事件がラーマの手によるものと判断したハルコたちエンゼルヴィーナスは、過去の事例が繁華街やスタジアムなど、人が密集するところで起きていることから、近隣地域で最も集客力のあるこのテーマパークを探索している最中なのだ。

しかし、午前中から二人で手分けした捜査も、とうにお昼を回った今になっても未だに

手がかり一つ掴めずにいる。

「こうしている間にも、怪人たちが動き出しているかもしれないのに。早く奴らの企みを阻止しなくちゃ……っ」

手がかりなしというミサキの報告に、ハルコは焦りを覚えていた。

これまで被害にあった人たちは、一様に生きる活力をなくし、ただ息をしているだけの生ける屍のような状態になっている。

しかも狙われたのはまだ若い男女ばかりで、彼や彼女たちの明るい未来は、一瞬にして刈り取られ、潰えてしまったことになる。

ラーマ襲来以前、ハルコが世界を巡る女子総合格闘技団体の若き旗手を謳歌していた頃。一分の隙もない引き締まったグラマラスボディと凛々しくも暖かみのある美貌、そして類まれなる格闘センスによって繰り出される美しい技の数々に、ハルコは男女問わず世界中の人々を魅了してきた。

そんな人々の笑顔に、ハルコ自身満足していたし、数多寄せられる声援に、他の誰かを勇気づけることのできる女子格闘家としての幸せを感じていた。

ラーマの攻撃によつて一度曇ったみんなの表情を、今度はエンゼルヴィーナスとして必ず守る。

親友のミサキとともに、対怪人用として極秘裏に製作されていた変身スーツを受け取っ

たあの日にそう心に強く誓った。

（許せないわラーマ。あなたたちの野望を阻止して、必ずみんなを元気な姿に戻してみせる！ 私たちエンゼルヴィーナスの手で!!）

一つの深呼吸で焦る気持ちを抑え込み、ハルコはミサキに搜索の続行を告げると会話を切り上げ、しなやかな脚線美を、守るべき市民たちの方へと一歩進めた。

「きゃあああああつつつつ!!」

ハルコが再び搜索を始めて数分後、十メートルほど先で女性の悲鳴が聞こえたかと思うと、その女性の隣には、まるで人形のように固まったままの男性が一人、地面に転がっていた。

「大丈夫ですか、しつかりして!」

急いで駆けつけたハルコは、男性の側に腰を屈め、声をかけた。

（くっ、やはり生体エネルギーを吸い取られて……。っ!! あれは……。っ!）

新たな被害者が出たことに悔しさを滲ませたハルコの瞳の端に、見覚えのある女の姿が映った。

衣服こそ観光客然としたものだったが、彼女が纏う雰囲気からは、明確な負のオーラを感じ取れた。

女はハルコの鋭い視線に気づくと、くるりとこちらに背を向け、人ごみの中へと消え入ってしまふ。

「待ちなさいっつ!!」

ハルコは鍛えた太腿にムチリつと力を込め、ダツと勢いよく立ち上がると、消えてしまつた女の後を追いかけた。

「はあはあっ……待ちなさいっ!」

どれだけ走つただろう。人を避けながらできるかぎり全力で追いかけるこちらの動きをあざ笑うかのように、女はスイスイと人ごみを避けていき、ハルコは現在改装中で誰もいないイベントステージ前までやつてきていた。

舞台の主役のように二人はステージの中央付近まで来ると、まるでココまで来るのを待つていたかのように女の足が止まり、妖しい笑みを浮かべながらこちらを向いた。

「ふふふ、お疲れ様。三上ハルコ……いいえ、エンゼルピンク」

濃いルーージュを乗せた唇から深く艶やかな声が吐き出される。

「私の正体を……。やはりあなたはっ!」

「そうよ。久しぶりね、ふっつ!」

女は衣服をバツと脱ぎ去る。ハラリと落ちる衣服の影から現れたのは、漆黒のボンデー

ジに身を包んだ妖しき魔女だ。

「ラーマ五大幹部・ダイアナ……。これまでの事件、すべてあなたの仕業なのね！」

女はラーマが誇る五人の幹部の一人、ダイアナだ。黒の女王、無慈悲なる魔女として人間から恐れられる非道の女。

これまでハルコたちエンゼルヴィーナスと何度も闘い、未だに決着はついていない強敵だ。

「かわいそうにねえ、あいつらまだまだ若いのにこれから一生、植物人間状態っ。あははっつ、やりたいこともできないって、ほんとかわいそう」

「くっ、黙りなさいっ！」

サディスティックな性格のダイアナが、その真性さを見せつけるように被害者たちの不幸を嘲り笑う。

その声には、自身の行為への反省や後悔など微塵も感じられず、ただ未来を失った人々を見るのが楽しくてたまらないといったマイナス感情がありありと滲み出ている。

「他の人の不幸を笑うなんて許せないっ！ 奪ったみんなのエネルギーを返しなさいっ!!」

他者の幸せを自身の幸せと感じるハルコとは真逆の精神構造に、正義のヒロインとして心が熱くなる。

「イヤにきまつてるでしょ？　ふふ、私は人間の不幸に哀しむ姿が、本当に楽しみなんだから」

「あなただって人は——っ！」

傲慢な笑みを浮かべるダイアナを、怒りに燃える切れ長の瞳が睨みつける。細い指先をギョツと握った。

「返さないなら、私の力で取り戻すだけよ——！」

ハルコの右手に装着されたブレスレットが、彼女の凜とした声、そして内から湧きあがる熱い心に呼応して、美しい羽を広げた天使を模した形に変わる。

ハルコは、ブレスレット「エンゼルマインダー」を天に向かって掲げ、昂る正義の高鳴りを輝かせる。

「エンゼルグレイス!!」

響いた声と同時に、ブレスレットから放たれた眩い光が、ハルコの若々しい肢体を包み込む。

刹那の後に、収束した光の中から桃色の変身スーツを身に纏った女性——悪に怯える人々を救済する正義の天使、エンゼルピンクが現れた。

顔には薄い緑色のバイザーが装着され、装着者の正体を隠すと同時に、視覚を主とした感覚群を大きく向上させてくれる。

ビームを受けて崩れこんだ片膝の体勢、前に出している左足の太腿に隠れた女のデルタ地帯が、爆発したみたいにギョーンッ！ と熱くなり、ピッチリと閉じられていたはずの淡い媚肉色の二枚貝が、ハルコのことを完全に無視して、わずかずつグハアッという口を開け始めたのだ。

「あふうううつつ！ くうつ、はあはあ……むふうううつつ」

（ど、どうしちゃったの私……いいっ!? か、身体が熱いわ……こ、声が勝手にいいいっ）
まるで全身を一気に蒸らされたみたいなきもちだった。

格闘技で鍛え抜かれた美神へバトルヴィーナスVに相応しい悩ましげな女体が、噴き出して止まらないネットついた汗にまみれて、スーツに覆われていない剥き出しの太腿は一回りほど肉厚を増し、今にも嘗め回したい脂の乗りきった牝足へと変貌している。

バイザーに隠された美貌は、うつすらと赤く染まり、小さな唇からはひっきりなしに女の喘ぎ声の切れ端が、本人の思惑を外れて漏れ出している。

太腿と同じく艶つぼさを増した全身の媚肉は、ただでさえピチピチだった桃色の変身スーツを余計にきつく仕立て上げ、収まりきらずにはみ出した悩ましい尻肉などは、ハイレグにグイグイと食い込んで、まるでいやらしい緊縛の紐を食い締めているかのようなのだ。

悪と闘う美天使の股間からは、汗ではない別のムワリとした臭気が漂い始めている。

ハルコ本人はそんな牝の艶つぼさを隠し消そうと必死に、内側からの情動を堪えてみせ

ている。

そんな偉い行為が、熱く火照ったエンゼルピンクを更に妖しく染め上げていった。

「ふうふうう……つつ。こ、これは……!? ダイアナ、あなたなにを……お!?」

「イイザマねえ。どうしたの？ 熱いの、甘いの？ 気持ちイイのお？」

跪くハルコを見下ろすダイアナ。

完全に逆転した立場を悦ぶように、魔女はエンゼルピンクの艶つぼさを増していく顔を見つめながら笑った。

「言っただでしょう、返してあげるって。生体エネルギーだって一種類じゃないのよ？ 私が吸い取ったのは人間の欲望——それも強く激しい性欲よ。うふふ、理性の壁を取っ払った純粹な情欲の塊。それをまともに浴びたあなたがどうなるか？ 動物のそう——象にこの前試してみたけど、秒で悶絶したっけねえ、あははつつ！」

サディスティックな高笑いを浮かべるダイアナを見上げながら、ハルコは戦慄に震えた。若い男女ばかりが狙われていたのは、それが最もピュアで濃厚な性欲を持て余しているからだろう。

象の話が本当かどうかはわからないが、今ハルコの身体に起きていることを思えば、決して嘘やハツタリではない——本気でそう思えた。

ハルコの若々しい肢体が、正義の心に突き動かされていたはずの女体が——たまらない

牝の情動に翻弄され、熱せられたバターのように高潔な理性そのものが溶けかかっているのだ。

「ふっ、くう……そんなこと、ゆ……許さないわダイアナ。私が必ずあなたを……ふううんんっ!!」

会話の途中でビクンツッ! とお尻が突きあがる感覚に見舞われた。すんでのところで自制したが、わずかでも気を抜けば、敵幹部の前で恥知らずな空腰を打ってしまいかねない情欲に襲われている。

「そんなので私を倒すですって? エンゼルピンク、おもしろいことを言うわねえ。なあに、その盛り上がった乳首は? スーツの上からでも欲情してるのが丸見えよ? ほら、唇から涎が出ちゃってるわよ。うふふ、情けない正義のヒロインねえ」

「っっ、はあ……ううっ」

仇敵から屈辱的なことを指摘され、慌てて掌で唇を拭う。

全身の発汗は収まる気配はなく、指先まで駆け抜けて、ジユクジユクとした甘い感覚がハルコの身体を縛りつける。

「ま、負けないわ……私はエンゼルピンク。ラーマからみんなの平和を……んく、ま、守るのが私の……使命、よ……くうっ」

甘ったるい痺れが抜けない下半身に無理やり力を込めて、艶っぽい太腿をフルフルいわ

せながらも、立ち上がって、再びファイティングポーズをとる。

(諦めちゃダメよ……こんなことで……つつ)

美少女格闘家だった頃から、ハルコは決して諦めることをしなかった。諦めれば自分を応援してくれる人たちを悲しませてしまう。

ましてや今は世界の命運を握る変身ヒロインの一人なのだ。ダイアナが仕掛けた卑劣な罠にかかった身体は、たまらない微熱を発し続けて、美しい女戦士にギブアップを勧めにくる。

けれど甘美な誘惑に負けてなどいられない。負けるわけにはいかない。

「返してもらおうわよ……くっ、みんなの未来を……ダイアナつつ！」

「へえ、すごいわねえ。本来なら悶絶死でもおかしくないのに。うふふ、敵ながらすごい精神力ね……でもこれを付けた後はどうかしらねえ？」

ダイアナはにやりと頬を緩ませると、腕を軽く前に突き出して、何事かを口にした。

「なつつ!? こ、これ……は、なん……なののおおっ!？」

ダイアナの掌に召喚された一匹の生物。得体の知れない茶色いスライム状のそれは、機敏さがまだ戻らないエンゼルピンク目掛けて飛びかかった。

そして彼女の股間部……熟した女の園をかううじて隠すハイレグレオタードの上にベタッと張りついたかと思うと、嫌な予感を感じたハルコが力づくで剥ぎ取ろうとするより一

瞬早く、体の内側に隠された長く太い突起を、熱く滾った女の炉心へとスーツの上から容赦なくぶち込んできた。

ズチュオオオオツツ！ 又チュツツ！ チュオオオツツ！！

「いひいんんんつつつ！！ おおおつつ、くほおおおおおおんつつ！！」

（な、なんなのコレえええつつつ!? い、いきなり膣内に……スーツごと擦れるううつつつつ!!）

ファイティングポーズをとっていたエンゼルピンクの背筋がギユンツと伸び上がり、ビククツツ！ と背筋がブルブルと震える。

バイザーの下の瞳は焦点をなくしたかのように白と黒の世界で満たされ、全神経が燃え盛る股間へと注がれる。

水気をはらんだいやらしい音とともに、ブチブチイイツツ!! という女から、牝へ
の階段を昇る薄膜が無残に、自身のスーツによつて破られる感覚と鮮血が出る様はつき
りとわかった。

けれど深い悲しみと悔しさ、さらには破瓜の痛みも一瞬で、慣れ親しんだ変身スーツの
感触がジメついた媚肉の穴へと到達すると、脳天を突き上げんばかりの快感がハルコの
すべてを包み込んでいた。

「お、おほおおお……んんつつ、うくううつ」

自分でも信じられないくらい太い声を吐き出しながら、まるでテントを張った男子がそうするように、ユサユサと揺れる見事な乳房ごと前かがみになって、屈辱と恍惚の重なりあった、なんともいえないそる表情を女幹部に見せつける。

「情けない格好ねえ。どう、気に入ってもらえたかしら。それはまあ、いわば生体バイブつてどこかしら？ 本来は侵略した星の女を調教するための道具なんだけど。うふふ、私にとつてはあなたみたいな生意気な小娘をいたぶるオモチャつてどこかしらねえ」

「あ……あふうう、くううん……おつ、ふううつつ」

反論のひとつくらい口にしたいが、突然の処女膜喪失、そしてそれ以上にはつきりと認識した——強制された、快感に、口をついて出るのは、まるで発情した牝獣のような吐息ばかりだ。

ダイアナがオモチャと称した生体バイブは、まるでハルコの膣に根ざした大樹のようにギツチリと奥まで挿入されており、そう簡単に引き抜くことは不可能だ。

しかも擬似男根の太さは性戯に長けた熟女が使用するような極太モノで、ついさつきまで処女だったハルコにはあまりに太い逸物だった。

エンゼルピンクは文字通り、大人の玩具をくわえ込んだまま、眼前の敵と対峙しなければならなかった。

そして悪の女幹部は、快楽と戦うハルコに更なる淫辱を課そうと、次の一手を呼び寄せる。

『ギユラララアツツ!!』

知能のかけらもない奇声をあげて現れたのは、ラーマの下級戦闘員たちだ。

元はラーマが侵略した他星の先住民だったらしいが、今では理性を剥ぎ取られて、ただ幹部たちの言うことを聞く奴隷へと調教されている。

彼らは膝をわずかに曲げ、腰を低く落とした独特の姿勢で、淫欲の熱気に悶えるピンクを取り囲む。

その数は十人強にものぼった。

「そんな状態じゃ私が相手をするまでもないわ。うふふ、さあお前たち。溜まつてるんでしよう？ 日ごろの鬱憤、その牝豚にぶちまけなさいつ。あははははっつっ！」

思考を失い、本能のみを残された戦闘員たちは、ダイアナの命令に即座に従い、熊のように両腕を左右に広げた格好で、一斉に襲いかかってきた。

「うくっ。ま、負けないわ！ こんな、こと……くらいで——っ!!」

身体中の神経が快楽を求めているみたいに過敏になって、正直立っているのも奇跡に思えた。

ネットリと湧き出る牝汗がツンと鼻について、頭がおかしくなってしまうそうだ。下手に動けば逆に窮地に陥ってしまいかねない。だが——。

「でやあああああつっ!!」

「ギユブアアアアッ！」「ゴエッ！」「ゲヘアアアアッ！」

迫ってくる全身グレー色の戦闘員たちに、ハルコの強烈な蹴りが見舞われる。間髪入れずに右ストレート、そして関節を極めたままの投げ！

元より戦闘力に差がありすぎる雑魚戦闘員たちは、正義のヒロインのまさかの反撃になすすべもなく倒れ伏す。

「んふううつつ！ くつ、ふんぐうつつ……はあはああつ!! か、かかつてきな……さ
いっつ!!」

蹴りを出すために身体をわずかに仰け反らせた瞬間、完全に勃起した二つの乳首がズリリイイッ！ とスーツの裏地によって擦りあげられた。

パンチのとき腰をひねると、媚肉の増した股間部と太ももが接触して、痺れんばかりの快楽電流が美女戦士の脳髓めがけて駆け上がる。

（き、効くうううつつ！ お、おかしくなりそうだわ……発情を我慢するのおお、こんなに辛いものだった……なんてえ。はひおおおつ）

見るものを艶っぽく誘惑するほどに、眉をひそめた懸命な表情で、暴れる快感波動を堪えて、ファイティングポーズをとり続ける。

周りの女子が色恋沙汰に興味を持つ中、すでにハルコは一流の女子格闘家として名を馳せていた。

自分の勝利や繰り出す技の数々に、人々が感動してさえくれば満足だったし、恋人はおろか自慰や、女の快感についてもひどくウブだったハルコ。

本来ならほんのわずか布地と過敏な肌が触れるだけで、狂乱するほどの快楽を得られる情欲エネルギーを注入されているのだ。

それでもなお、前を向いて闘い続けられるのは、ハルコがエンゼルピンクを名乗るにふさわしい強靱な精神力の持ち主だからだった。

「やるじゃない。けどまだまだ奴隷はいるのよ。それにね——」

悦楽の魔窟にとらわれながら、なお正義のために抗い続けるピンクの女戦士を見つめ、ダイアナはいじらしく、アイシャドーのかかった目を細めた。

「だあああつ！ やあつ！ この——つつ!! はあああううううんんんつつつ!!」

多勢に無勢の中、戦闘員たちに果敢に立ち向かっていたエンゼルピンクの瞳が、突然の衝撃に大きく見開かれ固まった。

（ひぎいいんつつつ！ う、動いてるっ！ バイブっ、これええつつ!? スーツごと、膣内で……ひぐうっ、ほひいいいいんんつつつ!!）

これまで肉の穴に突き刺さっているだけだった淫棒が、急にウネウネと、まるでミミズのようにハルコの蜜壺をかき混ぜ始めた。

しかも肉棒にはゴツゴツしたイボが無数に生え伸びており、上から被さっている変身ス

ーツの伸縮性もあいまって、まさにゴムをかぶった本物の逸物でグリグリと膣道をいじられていたのかのような錯覚を覚えこまされる。

「生体パイプってことは、そういう機能ももちろんあるわ。さあ、雑魚戦闘員相手にいつまでもつかしらせねえ。かわいいかわいい正義のヒロインちゃん」

「ひいつ、むふうう……ほおおつ、ふおおおつ!!」

ダイアナの軽口に応える余裕はすでに消し飛んでいた。

全身を媚薬漬けにされ、これまで抑えていた若い肉欲だけが際限なしに膨張していく。

今にも消滅してしまいそうな理性を保つだけでやつとだ。

頬は真っ赤に茹で上がり、身体そのものが発情した女性フェロモンといった感じで、闘うヒロインをエロティックに染め上げる。

「ギギヤアアツツ！」

極上の牝を前にしていきりたつた牡獣たちが本能をさらけ出して掴みかかってきた。

「ふくつ、ま……守らなきゃ、みんなのために……くう、は……ああああつ!!」

間を詰めてきた戦闘員の側頭部に向かって、強烈なハイキックを放つ——そのはずだった。

「はひつつ、ひきいいいいんんつつ!!」

(こ、擦れ……股あああああつっ！ バイブ激し……だ、ダメエエツツ!!)
 勢いよく太腿を動かせば動かすほど、局部に仕込まれた淫具の刺激をより強く感じてしまふ。

なにもしていなくても真っ白になってしまいそうだったのに、自ら腭肉できつく締め上げたパイブの感覚は、天才女戦士の戦闘意欲を融解させるに充分すぎる快感だった。

高く上がった右足の蹴りは、力なく戦闘員に受け止められ、逆に足首を相手の肩に担がれたまま、バレリーナのような恥辱の片足開脚を強要された。

「し、しま……放し、放しなさいいっ！ ふうんっつ、ひいうっつ!!」

掲げた右足はピシッと伸びきり、太ももから足先までの筋がプルプルと震えているのがわかる。

ただでさえ力の入らない左足は支点というよりも、開脚を強いられている右足と合わせて、淫ら極まりない牝のオブジェの一部と化している。

「はい、ゲームオーバーね」

散々苦しめられた獲物が弱っていることに気付き、劣情に火がついた戦闘員たちは、唯一にして絶対の観客であるダイアナを悦ばせるべく、正義の女戦士に被虐の快楽を叩き込む。

「な、なにをするの!! そんな……くうっ」

戦闘員数人に抱え上げられたエンゼルピンクの肢体が、屈辱に満ち溢れたM字開脚に処せられる。

汗でテラテラと光る悩ましい太ももの肉が、ギユムツときつく凝縮されている。

きついハイレグの切れ込みの端からは、汗ではないトロリとした半透明の液体がジワジワと染み出しており、宙に浮いてなお質感満点のお尻のラインをツウツと垂れ落ちて、地面にポタリポタリと淫猥な染みを作り出している。

「あつははつつ、敵の前で濡らすエッチな身体にお似合いな格好ね。私のバイブ、そんなに気持ちイイのかしら？」

「い、言うなあつ……くほうつ、こんなのエンゼルヴィーナスには効かな……いい、ひいっ」

ヴヴヴツツと、レオタードの切れ込みから淫靡な音が耳に響く。

(い、意識しちゃうっつ！ バイブううっ……あ、アソコもおおおっつ！)

ヌチヨヌチヨと生物的に蠢く茶色のスライムが張りついた股間は、ブルブルと振動を続ける円柱の魔具がピンクのスーツ越しにはつきりと見えてしまう。

今までできる限り目を逸らそうとしてきたのに、卑猥極まらない現実を見せつけられたハルコの牝欲が更なる快樂の高まりを呼ぶ。

そんな変身ヒロインの誘惑に、牡の衝動がいきり立つ。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>